

2020年8月20日

長野県出身プロ野球選手列伝 (NO1)

上原 昇 (2組)

上田高校同窓生で明治大学に進み、東京六大学野球で活躍した丸山清光さん(70期)が、9月に新刊を上梓する。題して『なんとかせい! 島岡御大の置き手紙』。明大野球部の名物監督、島岡吉郎氏との交流を綴っているという。上田高校の話も盛り込まれているようなので、野球に興味のある方は是非、手にすることをお勧めしたい。

<https://books.bunshun.jp/ud/book/num/9784160089792>

この話を契機に、ある先輩同窓生から『巨人軍 陰のベストナイン』(上前淳一郎著)という本の紹介があり、その中に長野県出身の巨人軍選手が何人か出ていることを知った。

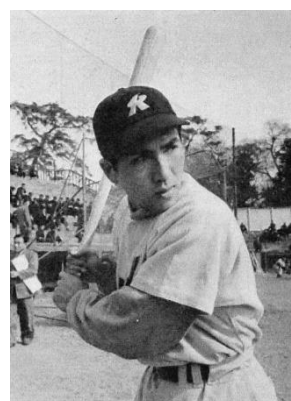
昔からプロ野球ファンだった私は、長野県出身のプロ野球選手はこれまでどんな人がいたのか調べてみることにした。その結果、もとより野球王国でもない長野県のことだから、その数は限られているが、個性的な選手が大勢いることが分かった。

以下、2編に世代を区切って見ていくことにしたい。第1編は我々より古い世代、第2編は我々と同世代から若い世代とした。(以下選手の敬称は略、年号は西暦)

1. プロ野球史上初の三冠王、中島治康(松本)

- ◆中島治康(1909~1987)は東筑摩郡中山村(現松本市)出身、旧制松本商業(現松商学園)では、エースで4番として全国中学野球大会で優勝。早大を経て巨人軍結成に参加。1936年から右翼手としてクリーンナップを打った。特筆すべきは1938年秋季で史上初の三冠王に輝く。これは1965年、野村克也の三冠王まで破られることのない大記録だ。戦争を挟み巨人軍の監督兼選手として活躍し、大洋球団に移籍し、1951年に引退。1963年には野球殿堂入り。

【写真1:中島(左)、岩下(中)、町田(右)】



2. 川上の控えの岩下(東部)と本塁打王の町田(長野)

- ◆岩下守道(1931~2015)は北御牧村出身、小県農業高校(東部高校を経て現東御清翔高

校) を出て、巨人軍第 1 期テスト生として 400 人の志願者のうち 6 人の合格者として入団。

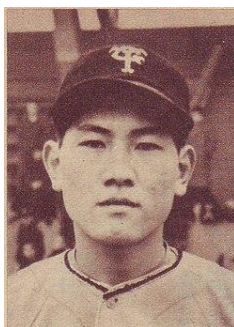
1 塁手として川上哲治の控えで過ごすことが多かったが、国鉄に移籍した 1959 年に大活躍 (打率、.280 で 7 位) した。

- ◆町田行彦 (1934～) は長野市出身、当時の長野北高校 (現長野高校) を経て、国鉄に入団。外野手として、1955 年には 31 本のホームランを打って本塁打王になっている。

3. 小森、土屋と堀内は松本出身

- ◆小森光生 (1931～) は松本出身、旧制松本市立中学 (現松本美須ヶ丘高校) から早大に進学。早稲田では三塁手として広岡達朗と三遊間を組み人気を博した。1954 年毎日オリオンズに入団、その後近鉄に移籍。内野、外野を起用に守るユーティリティプレイヤーであった。選手引退後はコーチ、監督として後進を育てた。

【写真 2: 土屋 (左)、堀内 (中)、小森 (右)】



- ◆土屋正孝 (1935～) は松本市出身、松本深志高校を出て 1953 年巨人軍に入団。長嶋、広岡と組んで二塁手として堅実な守備力を誇った。風貌から「眠狂四郎」のニックネームで、巨人から国鉄、阪神と移籍を重ねた。土屋の性格について巨人時代の同僚の広岡いわく、「あれは信州人の特徴ですね。人が右といえば左へ行きたがる。表面照れているようで、じつは挺でも人の言うことは聞かない。小森光生、堀内庄、みんなそうだ。そのところをわかって付き合えばとてもいい連中です」(「巨人軍 陰のベストナイン」より) 作家、沢木耕太郎の『敗れざる者たち』(1979 年、文春文庫) では、三人の三塁手として、同時期、長島茂雄、難波昭二郎 (関大卒) とポジションを争った話が面白い。今年 85 歳で、前述の小森 (89 歳)、町田 (86 歳) もあわせ存命らしい。
- ◆堀内 庄 (1935～2010) も松本出身で松商学園を経て巨人軍に。藤田と並ぶエース格投手として、1956 年、58 年には 14 勝を上げ活躍した。

4. 国鉄には長野県出身が 4 名も

手元にある「1962 年プロ野球選手写真名鑑」(ベースボール・マガジン社) の国鉄スワローズのページを広げると、なんと 4 名の長野県出身選手の顔が見られる。上記の町田、土屋に加え、後述の木次もこの年に巨人から国鉄に移っている。さらに中村修一郎 (松商学園からノンプロを経て国鉄へ入った内野手) の 4 名である。巨人から国鉄へという流れも多かったようである。

5. 松商学園出身の木次、塩原、三沢

- ◆木次文夫（1937～1977）は佐久市出身、松商学園、早大を経て、期待の大型スラッガーとして巨人入団した。一塁手として王貞治との競争となり、出場機会が限られた。入団初年度は23回打席に立って2安打、入団契約金額2千万円に対し、ヒット1本あたり1千万円といわれた。前記「巨人軍 陰のベストナイン」著者の上前は木次を“偉大なアマチュア”評している。悲劇の巨人一塁手は、岩下と同じ背番号“15”であった。国鉄に移籍後も活躍できず引退。40歳の若さで不運な生涯を閉じた。
- ◆塩原 明（1940～）は松商学園から巨人に入り、地味だが好守の二塁手として活躍した。1961年、南海との日本シリーズでは優秀選手賞を獲得している。引退後は、埼玉の名門ゴルフ場、嵐山CCの支配人などを歴任した。
- ◆三沢今朝治（1941～）は松商学園で塩原と同期、駒大を経て東映に入団、好打者としての評価は高かったが、一塁手として上背がないのと足が遅く、主に代打要員として活躍

【写真3: 木次（左、早大時代）、塩原（右、日本シリーズにて）、三沢（右）】



6. 母校OBの倉島

- ◆倉島今朝徳（1940～2013、58期）は母校（当時は上田松尾高校）出身の唯一（と思われる）のプロ野球選手である。高校では1957年、初の甲子園出場（捕手）を経て、明治大学でも主将、4番として活躍後、国鉄（その後サンケイ、ヤクルト球団に）に入団。現役は5年程度と短かったが、その後ヤクルト球団の専務を務めるなどプロ野球界への貢献は大きかった。関東同窓会の総会でも元気な顔をみせていたのに、73歳というまだまだの歳での逝去は残念であった。

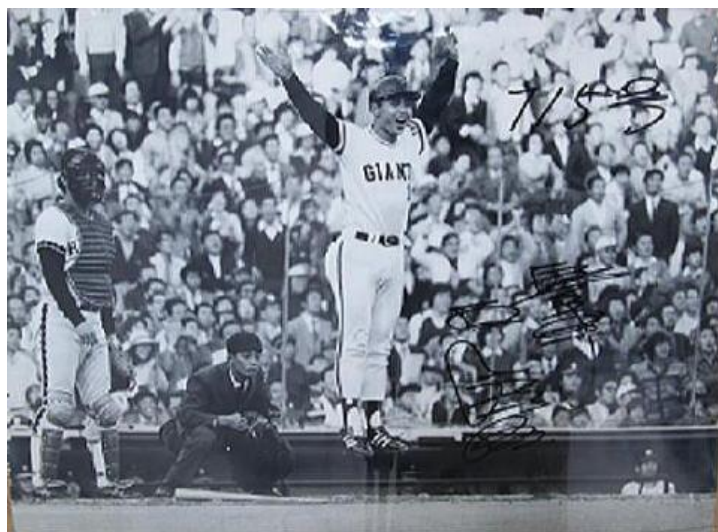
【写真4: ヤクルト球団専務としての倉島（左）】



《番外》選手ではないが、プロ野球審判員として活躍した同窓生を忘れてはいけない。

- ◆丸山 博（1932～2019、49期）は上田市出身で、野球選手としての経験はない。もともと長野県高野連審判であったが、好きが高じてプロ野球（セ・リーグ）の審判に。丸山は、1976年10月、後樂園球場で王選手の本塁打世界新記録（715号）達成試合の主審を務めている。関東同窓会会報19号（1978年6月発行）を見ると、「丸山博君を囲んで」という記事があり、面白い話が載っている。（同窓会HPから見る事ができる）因みに、丸山は私と高校同級の丸山幸雄君（2組）の叔父さんにあたる。

【写真5：王の本塁打世界新の瞬間を見守る丸山主審】



以上